

注

序 論

- ① 小野川秀美『清末政治思想史研究』 東洋史研究会 1960年 みすず書房 1969年
- ② 溝口雄三「近代中国像は歪んでいないか」(『歴史と社会』2号 1983年)
- ③ 溝口雄三『方法としての中国』 東京大学出版会、1989年
- ④ 久保田文次「アジアの近代をめぐって—中国を中心として」(国際歴史学会議日本国内委員会編『歴史研究の新しい波』 山川出版社 1989年所収)
- ⑤ 久保田文次「中国の近代化をめぐって」(辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門』 汲古書院 1992年)
- ⑥ 大谷敏夫『清代政治思想研究』 汲古書院 1991年
- ⑦ 鈴木智夫「洋務運動研究の現状と課題—わが国における近年の研究を中心に」(辛亥革命研究会編前掲書所収)
- 鈴木智夫『洋務運動の研究』 汲古書院 1992年
- ⑧ 久保田文次「中国の近代化をめぐって」15頁
- ⑨ 溝口雄三前掲書34頁
- ⑩ 湯志鈞『戊戌変法論叢』 湖北人民出版社 1957年
- ⑪ 湯志鈞『康有為と戊戌変法』 中華書局 1984年
- ⑫ 湯志鈞『戊戌変法史』 人民出版社 1984年
- ⑬ 湯志鈞『戊戌時期的学会と報刊』 台湾商務印書館 1993年
- ⑭ 小野川秀美前掲書
- ⑮ 王樹槐『外人与戊戌変法』 台湾商務印書館 1965年
- ⑯ 王爾敏『晚清政治思想史論』 学生書局 1969年
- ⑰ 張玉法『清季の立憲団体』 中央研究院近代史研究所 1971年
- ⑱ 林能士『清季湖南の新政運動(1895—98)』 国立台湾大学文学院 1972年
- ⑲ 小野和子『中国女性史』 平凡社 1978年
- ⑳ 吳廷嘉『戊戌思潮縦横論』 中国人民大学出版社 1988年
- ㉑ 王斌『維新運動』 上海人民出版社 1986
- ㉒ 菊池貴晴「清末における学会の意義について—政治結社としての南学会」(『歴史』6 1953年)
- ㉓ 転農「記強学会」(『民主潮』6—2 1956年)
- ㉔ 内藤戊申「強学会記事—汪康年伝稿之二」(『東洋史研究』19—4 1961年)
- ㉕ 王斌「強学会の人物及其派別」(『南京大学報(人文科学)』1957年)
- ㉖ 康同璧「清末の《不纏足会》」(『中国婦女』1957—5 1957年)
- ㉗ 小野和子「清末の婦人解放思想」(『思想』525 1968年3月)
- ㉘ 三石善吉「派閥と政党」(『中国—社会と文化』1 1986年)
- ㉙ 戈公振『中国報学史』 香港、太平書局 1956年

- ③⑩ 張靜盧輯註『中国近代出版史料』 香港太平書局 1964年
- ③⑪ 梁元生『林樂知在華事業与《万国公報》』 中文大学出版社 1978年
- ③⑫ 賴光臨『中国近代報人与報業』上・下 台湾商務印書館 1979年
- ③⑬ 方漢奇『中国近代報刊史』 山西人民出版社 1981年
- ③⑭ 張召奎『中国出版史概要』 山西人民出版社 1985年
- ③⑮ 王凤超『中国的報館』 人民出版社 1988年
- ③⑯ 桑兵『晚清学堂学生与社会变迁』 稻禾出版社
- ③⑰ 秦紹德『上海近代史報刊史論』 復旦大学出版社 1993年
- ③⑱ 熊月之『西学東漸和晚清社会』 上海人民出版社 1994年
- ③⑲ 近代期刊彙刊 中華書局 1991年
- ④⑩ 莊吉堯『京師大学堂』 国立台湾大学文学院 1970年
- ④⑪ 蕭超然『北京大学校史—1898—1949—』 上海教育出版社 1981年
- ④⑫ 陳東原『中国教育史』 台湾商務印書館 1926年初版80年4版
- ④⑬ 多賀秋五郎『中国教史』 岩崎書店 1955年
- ④⑭ 多賀秋五郎編『アジア近世教史』 文理書院 1966年
- ④⑮ 陳啓天『近代中国教育史』 台湾中華書局 1969年
- ④⑯ 齊藤秋男『中国現代教育史—中国革命的教育構造』 田畑書店 1973年
- ④⑰ 世界教育研究会編『中国教育史 世界教育史大系4』 講談社 1975年
- ④⑱ 舒新城編『近代中国教育資料（上、中、下）』 人民教育出版社 1961年
- ④⑲ 多賀秋五郎編『近代中国教育資料（清末編）』 文海出版社 1976年
- ⑤⑩ 緒季能「第一次自弁女学堂」『東方雜誌』 32卷3号 1935年
- ⑤⑪ 閔斗基「19世紀末中国の改革運動と上海の商人子弟」『東洋史学研究』第11輯 1977年
- ⑤⑫ 小林善文「北京大学と軍閥—蔡元培の改革とそれをめぐる闘争—」『史林』66卷3号 1983年

第一章 第二節

- ① 東京教育大学大学院中国社会経済史研究会「中国史の世界史的把握はどう進んだか」（2）歴史評論 186号 1966年
- ② 小野川秀美 前掲書。
- ③ 菊池貴晴「広学会の中国変法運動に与えたる影響について—変法自強の一考察—」歴史5 1953年
菊池貴晴「清末における学会の意義について—政治結社としての南学会—」
菊池貴晴「広学会と変法運動（序）—広学会の設立について」東洋史学論集1 1953年
- ④ 湯志鈞『戊戌変法史論叢』
湯志鈞『戊戌変法史』
- ⑤ 湯志鈞『戊戌変法史論』 上海群聯出版社 1955年
湯志鈞『戊戌変法史論叢』
湯志鈞『戊戌変法人物伝稿』上・下 中華書局 1961年 増訂本 1981年
- ⑥ 汪康年、梁啓超等主編『時務報』第10冊 華文書局 1967年『強学報、時務報』 中華書局 1991年

- ⑦ 劉伯驥『廣東書院制度』 8-11頁 國立編譯館 中華叢書編集委員會 1958年、再版 1978年
- ⑧ 譚嗣同『譚嗣同全集』 211頁 新華書店 1954年 增訂本 中華書局 1981年
今議將旧有立六書院、及新立算學館、併而為一、改建學堂於鼎城、……。
- ⑨ 中國史學會主編『戊戌變法』(四) 377頁 上海人民出版社 1957年
- ⑩ 同前(三) 219頁
……日設學、立立學堂、……
- ⑪ 譚嗣同、唐才常、熊希齡等主編『湘學報』(1) 531頁 台灣華文書局 1966年
恭值朝廷屢有整頓書院宏求實學之議、勉設輿地、算學、方言學會於校經書院……
- ⑫ 譚嗣同 前掲書 136頁
今欲人人皆明此理、皆破除界域、出而任事、又非學會不可。故今日救亡保命、至急不可緩之上策、無過於學會者。吾願各府州縣、就所有之書院、概改為學堂學會、一面造就人材、一面聯合衆力、官民上下、通氣一氣、相維相繫、協心會謀、則內患其可以泯矣、人人之全体其可以安矣。
- ⑬ ここで一言断わっておきたいことは、今まで述べて来、またこれから考察して行きたいと考えている學會についてであるが、學會、局、會といろいろ呼称されているものをひとまとめにして學會とするということである。図中の目的の所にある()の印は、内容を類推したことを表わしている。又、図中の〔 〕の印は、直接変法期の學會には該当しないが、関連があるのであげた。また、學會は主なものをあげた。なお、學會関係の史料を以下明らかにしておく。
- 梁啓超『戊戌政変記』 文海出版社 1964年
中國史學會主編 『戊戌變法』(一)~(四)
張靜虛輯註 前掲書
譚嗣同、唐才常、熊希齡等主編 前掲書
戈公振 前掲書
譚嗣同 前掲書
湯志鈞『戊戌變法人物伝稿』
馮自由『革命逸史』 商務印書館 1939年
- ⑭ 康有為『康南海自訂年譜』 35頁 文海出版社 1972年 『戊戌變法』(四) 134頁によれば、英米の公使が洋書と図器、劉坤一、張之洞、王文韶が5,000円ずつ、宋慶、聶士成が数千円ずつの寄附をした。
- ⑮ 學會参加者表については、⑬以外に、以下の史料、著書を参考にした。
- 趙爾巽等撰『清史稿』 中華書局 1977年
『清史列伝』 中華書局 1928年
沃丘仲子『当代名人小伝』 崇文書局 1919年
沃丘仲子『近代名人小伝』 広文書局 1980年
繆荃孫『統碑伝集』 江楚編訳書局 宣統2年 四庫善本叢書館景印版
閔爾昌『碑伝集補』 燕京大學國學研究所 1923年 四庫善本叢書館景印版
田原植次郎『民初官紳人名録』 中國研究会 1918年
唐祖培『民國名人小伝』 自連出版社 1953年

- 大陸雜誌社編『中国近代学人象伝』初輯 大陸雜誌社 1971年
- 中国国民党中央委员会党史委員会編『革命人物誌』中央文物供応社 1969年—1979年
- なお、図表中の〔 〕の印は、直接戊戌変法期の学会には該当しないが、関連があるのであげた。
- ⑩ 范文瀾『中国近代史』上 人民出版社 1962年
- なお、范文瀾の派別の背景については、第四章第二節第一項の北京強学会の参加者を参照されたい。
- ⑪ 中国史学会主編 『戊戌変法』(四) 56頁
- ……以正月初10日開大会於福建會館、閩中名士夫皆集、而君實為閩学会立領袖焉。
- ⑫ 同前 379頁 知新報第18冊 光緒23年4月16日
- 広西近日風氣大開、皆由該省大吏士紳、踴躍提倡、故一切善舉、次第興弁。……
- ⑬ 中国史学会主編 前掲書(四) 50~51頁
- 設會之意、符合南部諸省志士、連為一氣、相与講愛國之理、求救亡之法、……每七日大集衆而講學、……
- ⑭ 每會集者千數百人、君慷慨論天下事、聞者無不感動、故湖南全省風氣大開、……。
- ⑮ この関連図は、直接関連のある学会と間接の関連しかない学会との二つから出来ている。間接的な関連について一言するならば、この例としては、南学会と蘇学会の場合が考えられる。この両学会に参加した同一人の参加者はないが、両学会参加者の中に強学会参加者が見られるので、強学会を仲介として蘇学会と南学会は間接的な関連性があると考えられる。
- ⑯ この年表は、変法派、学会等の動きを見るために、吉林師範大学中国近代史教研室編『中国近代史事記』上海人民出版社 1961年、及び中国史学会主編前掲書(四)の戊戌百日維新運動大事表などに依拠して、旧暦を用いて作成したものである。
- ⑰ この学会設立年代表は、⑬に引用した史料にもとずいて作成したものである。しかし学会の章程には学会の設立年代がほとんど明記されていないので、学会の設立年代の多くは、学会の章程等が掲載された機関紙の発行年月日をもとにあらわしたものである。そのため学会の正確な設立年代がわからないものも多くあるので、凡例をあげて、一応の目安として書いたものである。又、学会設立の該当年月日は、旧暦によった。図表中、光緒23年のあとが光緒23~24年となっているのは、史料からそれまでしか判明しないものである。なお、設立年代の全く不明な学会は、算学会(福建省)、匡時学会、勸学会等である。
- ⑱ 馮自由 前掲書 自序1頁
- ⑲ 同前 47頁
- ⑳ Timothy Richard : Forty Five Years in China, New York 1916 pp.226.~228.
- ㉑ 中国史学会主編 『戊戌変法』(四) 387頁
- 林樂知編『中東戦紀本末』巻8 46-47頁 上海強学会 1896年
- ㉒ 中国史学会主編 『戊戌変法』(四) 395頁
- ㉓ 同前
- ㉔ 同前(二) 188頁
- ㉕ 同前 197頁
- ㉖ 同前 202頁
- ㉗ 同前 17頁

- ③ この図表は、⑬に引用した史料にもとずいて作成したものであり、地域を明らかにする一応の目安としたものである。学会の配列はなるべく年代順にしたが、設立年月や設立地域の不明な学会が多かった事を附記しておく。なお、設立地域が判明しない学会は、工芸学会、格致会、紅十字会、化学会、遊歴会等である。
- ④ その一例として、湖南省において学会設立に大きな役割を果たした譚嗣同の場合があげられる。
- ⑤ その例として、康有為、梁啓超の場合があげられる。
- ⑥ その一例として、湖南省における江標、陳宝箴、黄遵憲等の場合があげられる。
- ⑦ 例えば、梁啓超前掲書、241頁の林旭伝には、福建省の士夫達が福建会館に集って閩学会を組織している様子がうかがわれる。
- ⑧ 小野川秀美 前掲書 276 - 342頁
- ⑨ 佐々木保子「湖南変法運動について」『史紳』5号 昭和39年11月
- ⑩ 中国史学会編 前掲書(二) 17-99頁
- ⑪ 梁孟源『中国近百年革命史略』64頁 生活、読書、新知三聯書店 1954年

第一章 第三節

- ① 変法期の報館関係の主な史料、著書、論文は、簡見の限り以下の通りである。
- 林樂知編『教会新報』台湾華文書局再版 1968年
- 林樂知主編『万国公報』台湾華文書局再刊 1968年
- 『時務報』光緒22年(国会図書館所蔵)
- 汪康年、梁啓超等主編『時務報』華文書局再版 1967年
- 『強学報、時務報』中華書局 1991年
- 『知新報』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 譚嗣同、唐才常、熊希齡等主編『湘学新報』華文書局 1966年
- 唐才常、譚嗣同等撰『湘報類纂』大通書局 1967年
- 『農学报』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 『訳書公会報』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 『国聞報』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 『蒙学报』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 『格致新報』光緒23年(東洋文庫所蔵)
- 『昌言報』光緒24年(東洋文庫所蔵)
- 汪康年『昌言報』中華書局 1991年
- 康有為『康南海自訂年譜』文海出版社 1971年
- 梁啓超『戊戌政変記』文海出版社 1964年
- 梁啓超『飲泳室文集』台湾中華書局 1960年
- 中国史学会主編『戊戌変法』(四)
- 戈公振 前掲書
- 張静廬輯註 前掲書

湯志鈞『戊戌变法史論叢』

湯志鈞『戊戌变法人物伝稿』上・下

小野川秀美 前掲書

王樹槐 前掲書

林能士 前掲書

頼光臨 前掲書

方漢奇 前掲書

張召奎 前掲書

王鳳超編著 前掲書

秦紹徳 前掲書

- ② 康有為 前掲書 33頁

以士大夫不通外国政事風俗、而京師無人敢創報以開知識、变法本原、非自京師始、非自王公大臣始不可、乃与送京報人商、每日刊送千份於朝士大夫

- ③ 梁啓超『戊戌政変記』 288頁

康有為以為望变法於朝廷其事頗難然各国之革政未有不從国民而起者故欲倡之於下以喚起国民之議論振刷国民之精神使厚蓄其力以待他日之用於是自捐資創万国公報於京師徧送士夫貴人与梁啓超麦孟華撰之日刊送2千份…

- ④ Timothy Richard; Forty Five Years in China, New York, 1916, pp. 254-255.

Knowing that the monthly magazine of the Diffusion Society had been in circulation for many years amongst the leading officials without any opposition, they called their first paper by the same name as ours, Wang Kwoh Kung Pao, and it first consisted mainly of reprints from our magazine. The only difference was that our paper was printed in metallic type in Shanghai, whilst theirs was printed from the wooden type used in publication of the Government Peking Gazette. Thus in outward appearance it resembled the Government official organ, whilst in content it was introducing Western ideas propagated by the S.D.K.

- ⑤ Ibid., to face p. 254

- ⑥ この表ならびに、これ以後の表を作成するに当って、註①で述べた、史料、著書、論文及び第1章第2節註⑤を参考にした。図中〔 〕の印は、報館ではないが、関係があるので入れた。又、報中の役割の中()の印は筆者が用いた用語である。なお、ここに挙げられているのは主な報館である。

また『強学報』などこの節執筆後に書かれたものは、充分に反映されていない。

- ⑦ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 521頁

- ⑧ 戈公振 前掲書 21頁

- ⑨ 湯志鈞『戊戌变法史論叢』 255頁

第一章 第四節

① 変法期の学堂について触れた史料、著書、論文の主なものに以下のものである。

汪康年、梁啓超等主編『時務報』

譚嗣同、唐才常、熊希齡等主編『湘学新報』

『農学报』 光緒23年

康有為『康南海自訂年譜』

梁啓超『戊戌政変記』

梁啓超『飲冰室文集』

譚嗣同『譚嗣同全集』

中国史学会主編『戊戌变法』(四)

湯志鈞『戊戌变法史論叢』

湯志鈞『戊戌变法人物伝稿』上・下

小野川秀美 前掲書

莊吉発 前掲書

王樹槐 前掲書

林能士 前掲書

陳啓天 前掲書

多賀秋五郎『中国教育史』

世界教育研究会編 前掲書

多賀秋五郎編『アジア近世教育史』

齊藤秋男 前掲書

阿部 洋『中国の近代教育と明治日本』 福村出版 1990年

阿部 洋『中国近代学校史研究—清末における近代学校制度の成立過程』 福村出版 1993年

② 譚嗣同前掲書 211頁

今議將旧有之六書院、及新立之算学館、併而為一、改建学堂於县城、…

③ 中国史学会主編 前掲書(二) 34頁

即將各省府州県現有之大小書院 一律改為兼習中学西学之学校、至於学校等級、自應以省會之大書院為高等学、郡城之書院為中等学、州県之書院為小学、皆頒給京師大学堂章程、令其仿照弁理

④ 多賀秋五郎『中国教育史』 45-52頁

⑤ この図表ならびにこれ以後の図表の作成に当っては、註①及び第一章第二節⑬、⑮、第四節の註①の史料、著書、論文を参考にした。なお、ここに挙げられているのは主な学堂である。

第二章 第二節 第一項

- ① 務農会は、梁啓超によれば、農学会とも呼ばれているが、本項では、務農会公啓、務農会章に依拠して、務農会に統一した。湯志鈞氏は、『戊戌变法史論叢』の249頁で農学会(務農会)と述べておられる。

王爾敏氏は、前掲書の137頁から138頁にかけて、務農会以外に光緒21年の孫文の農学会や光緒30年代に設立された、四府農桑總會、長山農桑会、寧海農桑会、直隸農學總會、広昌農務分会、蚕桑学会、中国農会、甘泉農學總會、種山会、崑崙種樹会をあげておられ、農學關係の学会が、連綿として続いているのが知られる。

② 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 429頁

湯志鈞氏も、前掲書で同様のことを述べておられる。

農學爲富國之本、中土農學、不講已久、近上海同志諸君、創設農学会、擬復古意、采用西法、興天地自然之利、植國家富強之原、甚盛舉也。茲蒙寄到開弁章程、謹登諸報、以供衆覽。

③ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 428頁

汪康年、梁啓超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

此舉雖用西法、然植樹飼養、仍用本處農人、並不奪其固有之利。

④ 同前

⑤ 中国史学会主編『戊戌变法』(四) 381頁

上海農学会、現已開弁、僦屋新馬路之梅福里、……

⑥ 同前 429頁

農學門逕広博、約舉其要、厥有六端：日農、日圃、日林、日沢、日畜牧、日釀造、……

⑦ 同前

……繙訳欧美日本各種農書、農報、刊立報章、俾中国士夫咸知以化学攷地質、改土壤、求光熱、以機器資灌溉、精製造之法之理、……

⑧ 同前 428頁

汪康年、梁啓超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

繙訳農書、並刊刻農學報章、專訳各国農務諸報、……

⑨ 羅振玉によれば、『農學報』が発行された前後10年の間に百余種の農書が訳されたという。

⑩ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 537-539頁

汪康年、梁啓超主編 前掲書(三)第23冊 4-5頁

⑪ 戈公振 前掲書 128頁

⑫ 中国史学会主編 前掲書(四) 428頁

汪康年、梁啓超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

擬聘請化学師1人、弁別土宜、並酌購外洋機器農具、爲中国所不可少者、以佐人力不逮。

⑬ 中国史学会主編 前掲書(四) 431頁

……光熱図算、水化動植物等學、而化学動植物學尤要、必須聘化学師一人化驗土質、動植物學師一人、研究各物體性、……

⑭ 同前 428頁

汪康年、梁啓超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

本会有集款項在江浙兩省地方購田試弁、惟需款浩繁、尚冀四方同志解囊慨助、以成此舉、所購之田、即作爲會中公產。

⑮ 同前

……陸統添置田畝、……

⑩ 中国史学会主編 前掲書(四) 430頁

……本會擬籌款開闢各地、先自就近之地始、將來所闢之田、即為本會公產、以備興辦學堂等一切正用。

⑪ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編前掲書(二)第13冊 附1頁

農之為義、兼耕牧言、本會除樹芸五穀外、博採中外各種植物、——試種、兼及飼養牲魚等事、以廣利源。

⑫ 中国史学会主編 前掲書(四) 430頁

種植畜牧之法、土法之迂緩粗淺、泰西之靈捷精善、有識者共知之。……悉用新法試弁、一二年後、成效可觀、旁觀益知效法。

⑬ 同前 431頁

……本會一本西人成法、設售穀所、驗蚕種處、及購求西國大馬與各畜。

⑭ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

⑮ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 429頁

⑯ 同前 430頁

泰西所用機器、則皆精巧靈捷、有火力、馬力、人力之別、……如中國犁耕僅及數寸、而西國之犁、則深至五尺。凡是之類、不勝枚舉。本會購買各種器具、試驗果靈捷合宜、即如式仿造、以利用。

⑰ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

……將來試弁有效、即開設製造糖酒等廠、……

⑱ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 431頁

……即設廠製造、如前項所述、造糖釀酒各事、推廣利源。

⑲ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編前掲書(二)第13冊 附1頁

……稟請設立農務學堂。

⑳ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 431頁

事無巨細、非學不成、況農學事理繁瑣、尤必開學肄習講求。……先立一堂、日漸推廣、必使農田所在、皆有學堂、負耒之民、咸知新理新法、……

㉑ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

試弁之時、如有聰穎子弟情願從學者、可至本會學習、不收束脩、自備飯食、將來學成、即可派充各處分教席等職。(西國農部各員、無不由農學學堂出身者。)

㉒ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 431頁

十二、泰西一芸一物之微、必有賽會、各操所業以相比賽、褒勤警惰、厥意甚善。本會亦擬分種植畜牧製造各類、設賽會所以驗良苦、以求新理。

②⑨ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

一、海內同志願入會者、請將台銜住址開寄時務報館、以便遇事公同商酌。

③⑩ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 430頁

……凡願与会者、乞賜示銜名住址、俾按先後列入報章。

③⑪ 同前 428頁

汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

一、每年出入款項、匯錄登入本報、以杜浮銷、報章未行以前、則登時務報。

③⑫ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 430頁

五、本会応弁之事、門類繁多、費用甚巨、勢難予籌、茲先捐集款項、期立報章、其他各事、……

③⑬ 汪康年、梁啟超主編 前掲書(二)第13冊 附1頁

③⑭ 小野川秀美 前掲書

第二章 第二節 第二項

① 中国史学会主編 『戊戌变法』(二) 57頁

② 同前 87頁

③ 『農學報』については、次の著書、論文で触れられている。

湯志鈞『戊戌变法史論』

湯志鈞『戊戌变法史論叢』

戈公振 前掲書

方漢奇 前掲書

湯志鈞『戊戌变法史』

本論文 第一章第二節

④ 『農學報』第1冊 農學報館 光緒23年4月

……將以興荒漲之望利、扶種產之所宜、肄化学以糞土強、置機器以代勞力、志願宏大、條理万端、經費縣薄、未克具舉、既念癸端經始、在開風氣、維新耳目、詎書印報、實為樞輿、故遠法農桑輯要之規、近依格致彙編之例、區其門目、約有數端、曰農理、曰動植物學、曰樹芸、麥果桑茶等品皆歸此類曰畜牧、牛羊羴駝蚕蜂等物皆歸此類曰林材、曰漁務、曰製造、如酒糖酪黷之類曰化料、曰農器、曰博議、月勸一編、布諸四海、近師日本、以考其通變之所由、遠摭歐墨、以得立法之所自、追三古之實學、保天府之腴壤、……

⑤ 同前 農學報畧例一

一、本報之設、以明農為主、兼及蚕桑畜牧、不及他事、

⑥ 同前

本報詳載各省農政、增本会弁事情形、並訳東西農書農報、以資講求、俟報章日多、捐款漸裕、即添人專訳農書、不增報後、以期出書迅速。

⑦ 同前

本報並無論說、如海內同志、以撰述見教者、必有関農學者當択尤録入農会博議、以備衆覽。

- ⑧ 同前 一葉
……今本会編訳欧美日本各種農書農報、創立報章、
- ⑨ 同前
五本会応弁之事……茲先捐集款項、創立報章
- ⑩ 同前
- ⑪ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 381頁
上海農学会、現已開弁、僦屋新馬路之梅福里、……
- ⑫ 『農學報』第1冊 農學報略例二二
本報用白紙石印、每月刊報兩次、裝訂成冊、每次約三十葉内外。
- ⑬ 同前
一、本館設理事二人、一總理庶事、一潤色書報、每月束脩各二〇元、日本編訳一人、每月束脩六〇元、英文編訳一人、每月束脩一〇元、司帳一人、每月束脩四元、写字一人、每月束脩四元、雜役二三人、每月約費四五元、並常川住局。
二、本館開創伊始、用人務從簡少、經費務期節省、將來報務日繁、或須酌量增添弁事人等及束脩之處、俟臨時議訂。
三、本館出入帳目、每月清揭、每季增刊報末、以徵信實、除館中一應正用外、其余浮費、不得列入。
四、館中事務、凡捐貲諸君、任憑到館稽查、如有更改章程等事、可公同會議、以期集益。
- ⑭ 同前
一、報館為農會最要之一端、會中諸事、合先從報館弁起、惟每年館中用度、及印報之費、至省須四五千元、茲除會中已收捐款外、不敷尚多、尚冀海内同志、惠欸扶助、襄成盛舉。
二、本會銀錢出入、統由汪君穰卿主政、凡諸君助欸、請逕寄本館、由本館填給本會收條、並送請汪君簽字、以昭憑信。
三、凡捐資百元以上者、按期送報、捐50元者、送報1年、不再取資。
四、本報每冊零售洋一角五分、定閱全年者、每年三元、先收報費、當給收條為憑。
- ⑮ 湯志鈞『戊戌变法史』
- ⑯ 『農學報』第13冊 4-5葉
- ⑰ 同前 第17冊 7葉
- ⑱ 同前 19冊 5葉
- ⑲ 同前 6-8葉
- ⑳ 同前 第21冊 5-6葉
- ㉑ 同前 第22冊 8-9葉
- ㉒ 同前 第23冊 3-5葉
- ㉓ 同前 第27冊 6-7葉
- ㉔ 同前 第36冊 上論

第二章 第二節 第三項

- ① 『格致新報』に触れた著書、論文には、つぎのものがある。

戈公振 前揭書

本論文 第一章第二節

② 『格致新報』第一卷表紙。

③ 同前第一卷 1葉。

元黃剖判、万物胚胎、盈天地間皆物、盈天地間皆學也、人不學、曷可為人、學不窮理、曷足為學、泰西之學、派別支分、兵法商政、造船製器、以及農漁紡織牧礦諸務、無一不學、實無一不精、推原起點、大率由目前蠡淺之理、偶然觸悟、遂闢新奇、如瓦特因沸水而悟汽機、奈端因蘋果落地而悟吸力、其明証也。

④ 同前。

吾中國格致之學、說者謂劫遭秦火、遂失其傳、論者咸以為憾事、不知已失者其書、常存者其理、書有時漸滅、理歷久不磨、夫格致之亡、不亡於祖龍、實亡於魏晉、其時教化凌夷、風俗頹敗、佞老異說、橫塞中原。

⑤ 同前。

洎乎南宋、新安朱子崛起東南、斥佞老之非、補大學之欠、其言曰、大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理、而益窮之、以求至乎其極、斯即格致入門之要道。

⑥ 同前。

報之值輕、稍有力者、均得購閱、且能日標新義、以餉學者、故西國日報盛行、不經而走、考其名、有士農工商蒙學醫律之目、別其體、有新政異聞近事告白之分、其中於格致最有益者、莫如學問報、常設答問一條、俾學者疑而問、問而啓發之、法至美也、意至良也。人材蔚起、實肇於此、今中國時務農會蒙學算學各報、接踵提唱、海內之士、獲益良多、而做學問報者、依然蓋欠、竊欲翺關蹊徑、廣開風氣、以大興中國人材。

⑦ 同前 2葉。

格致二字、包括甚宏、淺之在日用飲食之間、深之實富國強兵之本、謂余不信、請歷陳之、一曰性理、探道之大原、弁理之真偽者也、一曰治術、論公法律例、條約稅則者也、一曰象數、究恆星天文、測量製造者也、一曰形性、分為四項、聲光氣電水熱力重諸事、隸於物性、金銀木炭鳥獸血肉諸事、隸於物理、質點凝動變化分合諸事、隸於化學、業性病狀人體骨架諸事、隸於醫學、至史地地誌、戶口風俗、足以見世故之得失、政教之成敗者、另屬紀事一門。

⑧ 同前。

⑨ 同前 付錄。

國興於治、治端於學、彙纂精實、胚胎衆理、為學之宗也、旁貫支通、比例明析、知行言起、為學之效也、況彼以巧迎、我以拙守、相去之數、奚啻倍千、則格致一學、為首務焉。

⑩ 同前 第一卷 28葉。

一、本報每份歲收餉洋四元零售每冊一角三分無郵政局之處則由代派處酌加寄費閱者須照數先付概不賒欠付餉之後本館或代派處掣給收條為憑遠處函購全年者即由原局帶帳收條不誤

一、本年因有閏月故雖自二月起仍作全年核算

一、凡代派者許於每份報餉中提二成作經理之費派報匯款在內不得有擅加報餉及索取酒資等情

一、本報首冊一概奉送不取分文以後各代派處必須先寄報餉然後將報寄上如欲額外多存報冊以備不時之

需亦必由代派處先將報資寄下以杜欠宕

一、凡函購本報者照定價並不折扣過遠之處另加寄費

一、凡寄書問難者信資先給

⑪ 同前 28葉—29葉

一、本報所訊西書務取時下名彥所著而興中國有益者報中所登之書概不割截即篇幅較長一期不能盡登亦就其每段結束處截止斷不割截句語致閱者意興索然

一、如有潛心西學洞識時務著有大作者幸祈書明 爵里郵寄來館採錄刊佈倘能彙集多除陸續刊登報章外再擬統經世文編別類分門以垂不朽

一、本館刊報與另有刊佈之書已稟請中西官憲存案如有翻刻或改換面目及與他書彙刻者查出必究

一、華士如欲購弁西學演試之器具亦可由本館函致歐洲代為購置但須繳其價之半

一、本館俟經費稍充即擬立一學會陳設各種器具每月二三次由教士主講演試

一、本館並無在外招摺情事館中司事亦無經弁此事者倘有射利之徒在外招摺等情幸祈閱報諸君深加察核

⑫ 『格致新報』の第1冊～第12冊の各卷末に見られる售報處をまとめたものである。

⑬ 『格致新報』の第1冊～第12冊の各卷初に見られる目次をまとめたものである。

⑭ 同前

⑮ 『格致新報』第1卷 3葉—7葉

⑯ 同前 7葉—8葉

一、動物之大旨、動物能長大、能往來活動、有知覺有生死。

二、植物能長大、有生死、然不能自出其所在之地位、并無知覺。

三、礦質倘無人移動、或遭他故變端、則永無改形之時。

四、動物族分四類、即脊類、圈體類、柔體類、光芒類。

五、脊類○乃指動物之有骨格者、如馬乃脊類也。

六、所以稱為脊類者、為動物所有之骨中、其脊有脊骨一行者也。

七、惟脊類之動物、有紅血。

八、圈體類○乃括飛虫蜘蛛蜈蚣硬殼虫等之類、即動物之無骨與紅血者、其身體乃諸圈相疊而成、譬諸木虱、乃屬圈體類。

九、柔體類○無骨無紅血、亦無圈體、其身軟而懦、有時或藏於殼內、譬諸蠶蛹乃柔體類。

十、光芒類○因其口在體之中心、與別類不同、口之四周、生有尖角、故名為光芒類、譬如星魚與海花、皆屬此類。

⑰ 前掲書 6葉

水為常見之物、然細為考察、亦為元質中之最奧者、稱為元質、一則為其為體質也、蒙既言火不能稱為體質、蓋凡物有熱而使之發光者即為火、而水之為體質、若有可必者、猶如金木土之另為一體質也、一則以水為純一之質、可與他質相合、夫以水為元質者、自古已然。

⑱ 同前

百年之前、由法國化學士考驗、謂水乃二種氣化合而成、其化合之力甚堅、故欲分其二氣質、則不如二氣質、化為水之易。

⑲ 同前 7葉

輕氣與養氣爲水之母、水與汽非獨爲輕氣、亦非獨爲養氣、乃二氣之相化合者也。

②⑩ 同前

②⑪ 同前 8葉

近海之地、其風不甚冷、亦不甚熱、職是故耳。故沿海之居民、較內地爲多、又觀近海之地、早晚有一定之風向、亦爲水不易冷、不易熱之故、蓋至晚間海與地皆冷、而翌早太陽東升之時、海水不易受熱、故地較海先熱、地面之空氣、亦即熱而上升、故空氣即較海面之空氣輕、而海面之冷空氣、即來而補其缺、是爲海風、及至日落之時、爲海水不易退熱、故地較海先冷、因有風向海而去也。

②⑫ 前掲書 第12卷 8葉

五行之理、華人於經傳中言之甚詳、其說與西人水火土氣四元之說、略有不同、蓋金木者已可包於水火土之中、如火能鍊金、水土能生金、火能製木爲炭、水土能生木、華人別出金木二條、不若西人四元名義之簡當、然相沿已久、已成牢不可破之勢、古人胎典、不宜棄之如遺、余故於論水火二行之後、不論氣而論金土木、遵華例也。

②⑬ 同前

金之爲用甚廣、化學八十原質中、金類之質、獨占六十、其體堅而發光、體堅則爲器利、發光則可寶、有種土類、內含金質、與養氣相和、而成金類、故金類之物、人多鍊土而得之、如今日五金等礦、無不於土中化分而出、則金土二行、似可不分。

②⑭ 同前 8葉-9葉

木亦諸質相合而成、地氣天時不同、則所生之木亦不同、所謂木者、一切花草穀果俱包括在內、故植物皆可謂之木、爲炭、爲油、爲顏料、爲香料木之原質非一、已可概見、去木之汁而乾燥之、則成煤炭、煤炭分二種、一燒煤、石炭與木炭是也、一晶炭、金剛石是也、凡造油酒等物、皆賴炭氣與輕氣爲用、今者總總林林、生齒日密、設不開飲食之源、則人類將滅、所謂飲食之源、莫如穀菜果薪、斯四者、皆非木不足爲濟、木之功顧不大哉。

②⑮ 同前 9葉

謂中國五行、實有畫蛇添足之誚、余謂五行之義、未可厚非、惟惜中國之人、借五行生尅之理、爲燒丹鍊汞、命相星卜之言、其說荒渺無憑、而蚩蚩者全恃術士爲生活、即治病如醫、亦取五行生尅之理、糾纏不清、此則余之所不解也。

②⑯ 『格致新報』第1冊から第12冊に見られるものをまとめたものである。

②⑰ 例えば、『益聞録』の1761号光緒24年3月初9日の目次には、論旨恭錄、秦檜論、俄日近情、保教章程、京報照錄などが見えている。

②⑱ 戈公振前掲書 129頁 なお、同書では、『格致新報』が『格致新聞』と書かれている。

第二章 第二節 第四項

① 梁啓超『戊戌政變記』

小野川秀美 前掲書

林能士 前掲書

佐々木保子 前掲論文

鄧澤洲「19世紀末湖南の維新運動」

② 中国史学会主篇 前掲書(四) 492頁

今事變益急、天子宵旰憚慮、惟廣立學棧、培植人材、爲自強本計。累降綸綍、布此義於天下、江淮閩浙、秦晉鄂蜀、聞風興起、雲鱗從萃、而吾湘以彫敝之餘、未克具舉。今值制軍張公、中丞陳公、督學江公、咸以一時通人、提倡新政、嘉惠斯士。吾湘士及今不思自厲、……將聘達人以主講授、選聰俊以充生徒、藏書籍以備觀摩、置圖器以資試驗。……

③ 同前 494 - 495頁

查泰西各學、均有精微而取彼之長、輔我之短、必以中學爲根本、惟所貴者不在務博貪多、而在修身致用。諸生入學三四年後、中學既明、西文習熟、即由本部院考選數十名、支發川資、或咨送京師大學堂練習專門學問、考取文憑、或咨送外洋各國、分住水師、武備、化學、農學、礦學、商學、製造等學堂肄業、俟確有專長、即分別擢用。……即有願由正途出身者、且可作爲生監、一體鄉試。……

④ 梁啓超『戊戌政變記』 303頁

今日欲伸民權必以廣民智爲第一義湖南官紳有見於民智之爲重也於是時務學堂之設意至美矣。

⑤ 中国史学会主篇 『戊戌變法』(四) 494頁

本年議定暫租衡清試館開辦、……

⑥ 同前 498頁

學堂地基已購定省城門外侯家壩高岸田數百畝、……

⑦ 同前 494頁

上年12月間、正在籌慮之際、適據前國子監祭酒王紳先謙等呈請設立時務學堂前來、……本年議定暫租衡清試館開辦、……

⑧ 同前 498頁

一、學生投考、距省近者、必須保送紳士帶領同到學堂報名、距省遠者、以府縣官印文爲憑、報名時自行填寫三代籍貫、及平日所讀書籍名目、以便核察、所有甘保各結、均略仿江南儲材學堂章程、列式於後。

⑨ 同前 499頁

一、外府州縣官紳保送之學生、必須確查該生性情資質、果堪造就、方可給予投考文憑、學生來往川資、暫由外府州縣官紳墊發、考試取錄後、即在學堂公款內撥還、惟保送咨文內、必註明平日所讀何書、所長何學、詳加考語、以備查核而杜冒濫。

⑩ 同前

一、學生考取入堂、試習三月、由總教習會同總理紳董嚴加甄別、以定去留、其有好學深思、通達經史時務、而口齒不合於西文者、姑准留堂肄業、專精中學一門。餘若資質魯鈍、性情執拗、舉動浮薄者、無待三月甄別之期、隨時屏退。

⑪ 同前

一、學生所學、中西並重、西文由淺及深、按格而習、中文則照總教習所定課程、讀專精之書、及涉獵之書、一年後再分門教授、各隨其性之所近、令治專門學問。

⑫ 同前

一、學生入堂、以五年學成出堂爲限、倘有畏難逃學、藉故請假、或有意滋事、希冀斥退、別圖生理者、照四川中西學堂例、除將該生屏退外、仍追繳歷年膏火銀兩、有父兄者、惟該父兄是問、無父兄者、惟該保送人是問。

⑬ 同前

一、學生每月所作日記課文、由總教習分教習評定後、彙交總理紳董詳閱、照單榜示、撫院學堂每年年終、定期臨堂、命題考試。

⑭ 同前

一、學生出路、俟五年期滿、由撫院學堂會同大考後、果其學有明效、應遵照總理衙門、奏定章程、給予科名仕進之階、或作爲生監、一體鄉試或咨送京師大學堂及出洋學習、或保薦爲使署繙譯隨員、與南北製造等局、差遣委用、以示鼓勵。

⑮ 同前 500頁

一、教習勤懇善誘、學生學業有成、應遵照總理衙門、奏定章程、由撫院奏請獎敘升途、其餘管堂等員、勤於將事、勞而不倦、亦由撫院擇尤保獎。

⑯ 同前

總理紳董及管堂紳士、各立稽查學生功過冊一本、每日所查學生用功勤怠、筆之於冊、每月月終與總教習分教習所彙分數、比較參觀、再定賞罰。

なお、これを改訂したものに、湖南時務學堂更定章程、湖南時務學堂詳細章程がある。

⑰ 同前

一、中西課程及堂規章程、別立專條另有刊本茲不贅。

⑱ 同前 503頁

……今與諸君子共發大願、將取中國應讀之書、第其誦課之先後、或讀全書、或書擇其篇焉、或讀全篇、或篇擇其句焉、專求其有關於聖教、有切於時局者、……量中材所能肄習者、定爲課分、每日一課、經學子學史學與譯出西書、四者間日爲課焉。度數年之力、中國要籍一切大義、皆可了達、而旁證遠引於西方諸學、亦可以知崖略矣。夫如是則讀書者、無望洋之嘆、無歧路之迷、而中學或可以不絕。今與二三子從事焉、若可行也、則將演爲學校報以質諸天下。讀書之功課、凡學者每人設習記一冊、分專精涉獵兩門、每日必就所讀之書、發新義數則、其有疑義、則書而納之待問匣以待條答焉、……

⑲ 同前 504頁

…今格致之書、略有譯本、我輩所已知之理、視前人蓋有加焉、因而益窮之、大之極恆星諸天之國土、小之及微塵血輪之世界、深之若精氣游魂之物變、淺之若日用飲食之習睹、隨時觸悟、見淺見深、用之既熟、他日創新法製新器闢新學、皆基於是、高材者勉之。窮理之功課、每剛日諸生在堂上讀書、功課畢、由教習隨舉目前事理、或西書格致淺理數條以問之、使精思以對、對既徧、教習乃將所以然之理揭示之。

⑳ 同前

……樂羣之功課、俟數月以後、每月以數日爲同學會講之期、諸生各出其習記冊、在堂互觀、或有所問、而互相批答、上下議論、各出心得、其益無窮、凡會講以教習監之。

㉑ 梁啓超前揭書 305—306頁

學堂広設外課各州県咸調人來學也……外課生總以不限年爲當前……可取者亦三十人……擇其高才年在三十以下者每縣自三人至五人咨送來學其風始廣……此項學生速則半年遲則一年即可遣散另招新班擇其學成者授以憑記可以爲各縣小學堂教習一年之後風氣稍成……

- ② 梁啓超著、小野和子訳注『清代學術概論—中国のルネッサンス』（東洋文庫）270頁 平凡社 昭和49年

③ 同前

- ④ 譚嗣同 前掲書 366頁

熊秉三來書、言湘中官紳決計聘請卓如一琴兩君爲時務學堂總教習、黃公度尤極力贊成。

- ⑤ 中国史学会主編 『戊戌変法』（二） 585頁

查去年初立學堂、延聘梁卓如爲教習、發端於公度觀察、江建霞、鄒沅帆及齡與伯嚴皆贊成之、繼則張兩璣、王益吾師亦稱美焉。……既今年添請歐雲樵、唐鑑丞二人……

- ⑥ 同前 592頁

已擬偕分教韓君孔广名文學葉君湘南名覺同來矣。

- ⑦ 湖南省志編集委員會『湖南省志第一卷 湖南近百年大事記述』 140頁湖南人民出版社 1959年 大安 1966年 第二次修訂本 156頁 1980年

- ⑧ 中国史学会主編 『戊戌変法』（四） 498頁

一、學生定額一百二十人、按府分派、由紳董稟請撫學院會同招考副試、擇取十二歲至十六歲、（初定年限係自十四歲起至二十歲止、繼思年愈幼則氣質語言較易更變、故改從此。）聰俊樸實子弟、入堂肄業。其報名投考者、距省近之府縣、由紳士保送、距省遠之府縣、由官紳保送。除第一期考試已取錄學生四十名外、第二期應定正月下旬、第三期應定二月下旬、陸續考取、三期限滿、既行截止、遲到者概不收考。（ ）内は原註。

- ⑨ 梁啓超著、小野和子訳注 前掲書 270頁

- ⑩ 蘇興『翼教叢編』 363-364頁 台湾國風出版社 民國59年

梁啓超及分教習廣東韓葉諸人自命西學通人實皆康門謬種而譚嗣同唐才常樊鍾秀翁輩爲之乘……

- ⑪ 湖南省志編集委員會前掲書 145頁 第二次修訂本 162頁

湖南時務學堂創弁后、刺激了各府縣的開明士紳、紛紛改革書院章程、并有計畫地創辦新的學堂。

- ⑫ 梁啓超『飲冰室文集』—— 2頁

此四十人者、十余年來強半死於國事、今存五六人而已。

第二章 第二節 第五項

- ① 莊吉發 前掲書

多賀秋五郎編『中国教育史』

小野川秀美 前掲書

多賀秋五郎『アジア近世教育史研究』

陳啓天 前掲書

齊藤秋男 前掲書

世界教育史研究会編 前掲書

大久保英子『明清時代書院の研究』 國書刊行會 1975年

- 中村哲夫「科举体制の崩壊」(『講座中国近現代史3 辛亥革命』所収 東京大学出版会 1978年)
 拙論「中国の近代化とW. A. P. マーティン」キリスト教史学第32集 1978年
- ② 毛佩之編『变法自強奏議彙編』卷一〇 10頁 上海書局 1901年
- ③ 中国史学会主編『戊戌变法』(二) 34頁
 即將各省府州縣現有之大小書院、一律改為兼習中學西學之學校、至於學校等級、自應以省會之大書院為高等學、郡城之書院為中等學、州縣之書院為小學、皆頒給京師大學堂章程、令其仿照弁理。
- ④ 毛佩之編 前掲書 卷一〇 8頁
- ⑤ 同前 9頁
- ⑥ W. A. P. Martin; *The Awakening of China*, New York, 1906, P. 210.
- ⑦ 世界教育史研究会編 前掲書
- ⑧ 林樂知編『中東戰紀本末』卷八 46-48頁 上海廣學會 1896年
 中国史学会主編 前掲書(四) 387頁
 丙申正月、孫燮臣……、學強學會有利無弊之說、造膝密陳、皇上從諫如流、俯允設立官書局、而仿同文館成例、隸諸總理衙門。當經總署王大臣、請旨派員管理、奉旨：『派孫家鼐管理、欽此。』
- ⑨ 李端棻「請推廣學校摺」光緒二十三年五月初二日(中国史学会主編前掲書(二)所収 293頁)
 京師大學堂選舉貢監年三十以下者入學、其京官願學者聽之。學中課程一如省學、惟益加專精、各執一門、不遷其業、以三年為期。
- ⑩ 「總理衙門議覆李端棻請廣學校摺(『光緒乙未後奏議輯覽』卷三所収 光緒二十二年七月十三日)
- ⑪ 中国史学会主編『戊戌变法』(二) 425頁
 奏為遵籌京師建立學堂大概情形、……仰祈聖鑒事：……臣查本年正月總署原奏、請立官書局、本有建設學舍之說、臣奉命管理局、所奏開弁章程、亦擬設立學堂、延請教習、是學堂一議、……亦即官書局分內廣弁之事。……
- ⑫ 同前 426-428頁
- ⑬ 同前 17頁
 數年以來、中外臣工講求時務、多主变法自強。邇者詔書數下、如開特科、裁冗兵、改武科制度、立大小學堂、皆經再三審定、籌之至熟、甫議施行。……京師大學堂為各行省之倡、尤應首先舉弁、著軍機大臣、總理各國時務王大臣、會同妥議奏、……
- ⑭ 同前 26頁
 ……前因京師大學堂為各行省之倡、特降諭旨、令軍機大臣、總理各國時務王大臣、會同議奏、即著迅速覆奏、毋稍遲延。……
- ⑮ 同前 28頁
 ……派孫家鼐管理大學堂事務、弁事各員、……所有原設官書局、及新設之訳書局、均著併入大學堂、由管學大臣督率弁理。……
- ⑯ 同前 29頁
 朱壽明編『光緒朝東華錄』(四) 92頁 光緒二十四年 中華書局 1958年
- ⑰ 中国史学会主編 前掲書(二) 411頁
 ……中国當更新之始、京師為首善之基創茲鉅典、必當規模宏遠、條理詳備、始足以隆觀聽而育人材。

臣等仰体聖意、広集良法、斟酌損益、草定章程、規模略具、举其要義、凡有四端：一曰、寬籌經費。二曰、宏建學舍。三曰、慎選管學大臣。四曰、簡派總教習。……

- ⑮ W. A. P. Martin, op. cit., 210.

In 1898 the young Emperor, taught by defeat at the hands of the Japanese, resolved on a thorough reform in the system of national education. It would never do to confine the knowledge of Western science to a handful of interpreters and attaches. The highest scholars of the Empire must be allowed access to the fountain of national strength. A university was created with a capital of five million taels, and the writer was made president by an imperial decree which conferred on him the highest but one of the nine grades of the mandarin.

- ⑯ 中国史学会主編 『戊戌變法』(二) 51頁

……至派充西學總教習丁建良、擢孫家鼐面奏、請予鼓勵、著賞給二品頂戴、以示殊榮。

- ⑰ 同前(四) 486—487頁

京師大學堂為各省之表率、萬國所瞻仰、規模當極宏遠、條理當極詳密、……今京師既設大學堂、則各省學堂皆當屬大學堂統轄、……

- ⑱ 同前(二) 28頁

……此次設立大學堂為廣育人材請求時務起見、……

- ⑲ 同前

現擬該王大臣、詳擬章程、參用泰西學規、綱舉目張。

- ⑳ 朱壽朋編 前揭書(四) 總4108頁

大學堂設立京師。以為各省表率。

- ㉑ 中国史学会主編 『戊戌變法』(四) 489—490頁

西國學堂所讀之書皆分兩類：一曰普通學、二曰專門學。普通學者、凡學生皆當通習者也。專門學者、每人各占一門者也。今略依泰西、日本通行學校功課之種類、參以中學列表如下：

經學第一 理學第二 中外掌故學第三 諸子學第四 初級算學第五 初級格致學第六 初級政治學第七 初級地理學第八 文學第九 体操學第十

以上皆普通學、其必讀之書、皆由上海編輯局纂成功課書、按日分課、無論何種學生、三年之內必須將本局所纂之書、全數卒業、始得領學成文憑、惟体操不在功課書內。

英國語言文字學第十一 法國語言文字學第十二 俄國語言文字學第十三 德國語言文字學第十四 日本語言文字學第十五

以上語言文字學五種、凡學生每人自認一種、与普通學同時並習、其功課書悉各該本國原本。

高等算學第十六 高等格致學第十七 高等政治學第十八 原註法律學屬此門 高等地理學第十九 原註測繪學屬此門 農學第二十 礦學第二十一 工程學第二十二 商學第二十三 兵學第二十四 衛生學第二十五 原註醫學屬此門

以上十種專門學、俟普通學卒業後每學生各占一門或兩門、其已習西文之學生即讀西文各門讀本之書、其未習西文之學生、即讀編輯局譯出各門之書。

- ㉒ 同前 490頁

凡學生在二十以下、必須認習一國語言文字。其年在二十以上、舌本已強、不能學習者、准其免習、即以識出各書為功課；惟其學成得獎、當與兼習西文者、稍示區別。

②6 同前

本學堂以實事求是為主、……亦非如前者學堂之僅襲皮毛、所定功課、必當嚴密切實、乃能收效。今擬凡肄業者、每日必以六小時在講堂、由教習督課、以四小時歸齋自課；其在講堂督課之六小時、讀中文書西文書時刻各半。除休沐日之外、每日課肆時刻不得欠少、不遵依者、即當屏出。

②7 同前

考驗學生功課之高下、依西例、用積分之法、每日讀編輯局所編普通學功課書、能通一課者、即為及格。功課書之外、每日仍當將所讀書條舉心得、入簡冊中、其簡冊呈教習評閱、記注分數以為高下之識別。其西文功課、則以背誦默寫解說三事記注分數。每月總核其數之多寡、列榜揭示。

②8 同前 490—491頁

每月考課一次、就普通學十類中每類命一題、……其頭班學生習專門學者、則命專門之題試之。由教習閱定、分別上取、次取。其課卷簡記列高等者擇尤刊布、如同文館算學、課藝之例、布諸天下、以為楷模。

②9 同前 488頁

……京師大學堂為各省表率、體制尤為崇闡、今擬設一大藏書樓、廣集中西要籍、以供士林流覽而廣天下風氣。

③0 同前

泰西各種實學、多藉試驗始能發明、故儀器為學堂必需之事、各國都會；率皆有博物院、蒐集各種有用器物、陳設其中、以備學者觀摩、事半功倍。今亦宜仿其意、設一儀器院、集各種天算、聲光、化電、農礦、機器、製造、動植物各種學問應用之儀器、咸儲院中、以為實力考求之助。

③1 同前（二） 28頁

③2 毛佩之編 前揭書 卷一〇 9頁

……別立小學堂於堂中使師範生得以有所考驗實一舉兩得之道

③3 同前 11頁

③4 國家檔案局明清檔案館編『戊戌變法檔案史料』 286頁 中華書局 1958年

……另設醫學學堂、考求中西醫學、即歸大學堂兼轄。

③5 中國史學會主編『戊戌變法』（二） 28頁

……所需興辦經費、及常年用款著戶部分別籌撥、……

③6 趙爾巽他『清史稿』 338頁 上海聯合書局 1942年

③7 中國史學會主編 前揭書（二） 411頁

臣等約計開辦經費、需銀三十五萬兩、常年經費一十八萬兩有奇、……

③8 同前 429頁

應請旨飭下戶部非飭南北洋大臣、無論何款、按月各撥銀五千兩、解交戶部、作為京師學堂專款。

③9 毛佩之編 前揭書 卷一〇 11頁

開辦經費以建學堂購書購器及聘洋教習來華之川資為數大宗今畧列於下 建築學堂費約十萬兩 建築藏書樓費約二萬兩 建築儀器院費約二萬兩 購中國書費約五萬兩 購西文書費約四萬兩 購東文書費約

一万兩 購儀器費約十萬兩 洋教習川費約一万兩

右開弁經費予算表約共銀三十五萬兩

- ④ 同前 10-11頁 この史料は、本来は從書きなので、總計の所が右となっている。

中国官制向患祿薄今既使之実事求是必厚其薪俸使有以自養然後可責以衷心任事除管学大臣不別領俸外其各教習及弁事人應領俸薪列一中數為表如下

職 名	人數	每人每月薪水銀	每年合計銀
總 教 習	一	三百兩	三千六百兩
專門學分教習西人	十	三百兩	三萬六千兩
鴻通學分教習頭班	六	五十兩	三千六百兩
鴻通學分教習二班	八	三十兩	三千八百八十兩
西文分教習頭班西人	八	二百兩	一萬九千二百兩
西文分教習二班	八	五十兩	四千八百兩
總 弁	一	一百兩	一千二百兩
提 調	八	五十兩	四千八百兩
藏書樓提調	一	五十兩	六百兩
供 事	三十	四兩	一千四百四十兩
膳 錄	八	四兩	三百八十四兩

右教習及其餘弁事人薪俸豫算表第一 統計每年開銷銀八萬一千六百兩

學生分為六級每級以所領膏火之多少為差列表如下

級 數	人數	每人每月膏火銀	每年合計銀
第 一 級	三十	二十兩	七千二百兩
第 二 級	五十	十六兩	九千六百兩
第 三 級	六十	十兩	七千二百兩
第 四 級	一百	八兩	九千六百兩
第 五 級	一百	六兩	七千二百兩
第 六 級	一百六十	四兩	七千六百八十兩
附設之小學堂學生	八十	四兩	二千四百兩

右學生膏火豫算表第二 統計每年開銷銀五萬四千八十兩

其餘各項雜用列表如下

火食	共五百六十人	每人每月銀三兩	每年約一萬六千兩
華文功課書	每學生一分	每分約銀二兩	每年約一萬兩
西文功課書	每學生一分	每分約銀二兩	每年約一萬兩
獎賞	每月銀一千兩	每年共一萬二千兩	
紙張及墨水洋筆等		每年約二千兩	

僕役薪工飯食 約用一百人 每年約三千六百兩

豫備格外雜用 每年約五千兩

右其餘雜用豫算表第三 共銀五萬六千六百兩第三表總分銀數多有未符不敢能度

三表合計毎年共應開銷銀一八萬八千六百八十兩之譜是為常年統計經費之數

④ 此以後（ ）内の官職は、筆者の私訳である。

なお、京城大学堂奏派總弁提調名單（中国史学会主編前掲書（三）所収 384 頁）によれば、以下の11名の名が見える。

總 弁	張 元 濟	刑部主事
提 調	翰林院侍講	黃紹箕
提 調	翰林院編修	朱祖謀
提 調	翰林院編修	余誠格
提 調	翰林院修撰	駱成驥
提 調	翰林院編修	李家駒
支 應 提 調	戸 部 主 事	杜国盛
藏書樓提調	詹事府左春坊左庶子	李昭煒
儀器院提調	工部郎中	周 璟
管理雜務提調	戸部主事	王宗基
管理雜務提調	工部員外郎	楊士燮

④ 毛佩之編 前掲書卷一〇 11頁

第一節 設管學大臣一員以大學士尚書侍郎為之署如管國子監事務大臣之職

第二節 設總教習一員不拘資格由 特旨擢用署如國子監祭酒司業之職

第三節 設分教習漢人二十四員由總教習奏調署如翰林院五經博士國子監助教之職其西人為分教習者不以官論

第四節 設總辨一人以小九卿及各部院司員充

第五節 設提調八人以各部院司員充一人管支應五人分股稽查學生功課二人管堂中雜務

第六節 設供事十六員膳錄八員

第七節 藏書樓設提調一員供事十員

第八節 儀器院設提調一員供事四員

第九節 以上各員除管學大臣外皆須常川駐紮學堂

④ 同前 9-10頁

④ 同前 8頁

第一節 同文館及北洋學堂等多以西人為總教習然學堂功課既中西並重華人容有兼通西學者西人必無兼通中學者前此各學堂於中學不免偏枯皆由以西人為總教習故也即專就西文而論英法俄德諸文並用無論任聘何國之人皆不能節制他種文字之教習專門諸學亦然故必擇中國通人學貫中西能見其大者為總教習然後可以崇體制而收實效

第二節 學生之成就與否全視教習教習得人則綱目畢舉教習不得人則徒糜巨帑必無成效此舉既屬維新之政實事求是必不可如教習庶吉士國子監祭酒等之虛應故事宜取品學兼優通曉中外者不論官階不論年齒務以得人為主或由總理衙門大臣保薦人才可任此職者請 旨擢用

第三節 設通學分教習十人皆華人英文分教習十二人英人華人各六日本分教習二人日本人華人各一俄德法分教習各一人或用彼國人或用華人隨所有而建專門學十種分教習各一人皆用歐美洲人

第四節 用使臣自辟參隨例凡分教習皆由總教習辟用以免納鑿之見而收指臂之益其歐美人或難於聘請者則由總教習總辦隨時會同總署及各國使臣向彼中學堂商請

第五節 現當開辦之始各學生大率初學必須先依編譯局所編出之通功課卒業然後乃學專門計最速者亦當在兩年以後現時專門各學之分教習如尚無學生可教即暫以充編譯局譯書之用

④5 同前

第一節 學生分為兩項第一項 諭旨所列翰林院編檢各部院司員大門侍衛候補候選道府州縣以上及大員子弟八旗世職各省武職後裔之願入學堂肄業者第二項各省中學堂學成領有文憑咨送來京肄業者

④6 同前

第二節 學生分作兩班其治各種通學已卒業者作為頭班現治通學者作為二班第一項學生投考到堂之始皆作為二班以漸而升第二項學生咨送到堂時先由總教習考試如實係曾經治通學卒業者即作為頭班若未卒業者即作為二班俟補足後乃升

④7 同前

第三節 恭釋 諭旨其有願入學堂者均准入學肄習等語似不必先行甄別考錄仰見廣大教澤之 聖意惟絕無節制人數既多其中咸有沾染習氣不可教誨或資質劣下難以成就者在所不免若令一體雜廁恐於堂中功課有礙今擬凡此各項人員願來就學者取結報名投到先作為附課生一月以後由總教習提調等察其人品資質實可教誨然後留學庶幾精益求精成就較多

④8 同前

④9 同前

⑤0 同前

等次	額 數	每月膏火
第一級	三十人	二十兩
第二級	五十人	十六兩
第三級	六十人	十兩
第四級	一百人	八兩
第五級	一百人	六兩
第六級	一百六十人	四兩

⑤1 同前

⑤2 同前

第七節 於前三級學生中選其高才者作為師範生專講求教授之法為他日分往各省學堂充當教習之用

⑤3 同前 八頁—九頁

第八節 西國師範生之例即以教授為功課故師範學堂每與小學堂並立即以小學堂生徒命師範生教之今釋諭旨凡大員子弟八旗世職等皆可來學未指明年限今擬擇其年在十六以下十二以上者作為小學生別立小學堂於堂中使師範生得以有所考驗實一舉兩得之道

⑤4 同前 九葉頁 ⑤ 同前

第二節 本年正月初七日 上諭已有各省學堂經濟科舉人經濟科貢士各名號今擬通飭各省上自省會下及府州縣皆須一年內設立學堂府州縣謂之小學省會謂之中學京師謂之大學由小學卒業領有文憑者作為經濟科生員升入中學由中學卒業領有文憑者作為舉人升入大學由大學卒業領有文憑者作為

進士引 見授官既得舉人者可以充各處學堂教習之職既得進士者就其專門各因所長授以職事以佐新政惟錄用之愈廣斯成就之益多

56 同前

第三節 京師大學堂多有已經授職之人員其卒業後應如何破格擢用之處出自 聖裁其各省中學堂生如有已經中式舉人者其卒業升入大學堂之時亦即可作為進士與大學堂中已經授職之人員一體相待

57 同前 九頁

第四節 大學堂中卒業各生擇其尤高才者先授之以清貴之職仍遣游學歐美各國數年以資閱歷而期大成遊學既歸乃加以不次擢用庶可以濟時艱而勸後進

58 同前

第五節 學生既有出身教習亦宜獎勵今擬自京師大學堂分教習及各省學堂總教習其實心教授著有成效確有憑證者皆三年一保舉原係生監者賞給舉人原係舉人者賞給進士引 見授職原係有職人員者從異常勞績保舉之例以為盡心善誘者勸

59 世界教育史研究会編 前掲書 52頁

60 多賀秋五郎 前掲書 126頁

61 同前 128頁

62 世界教育史研究会編 前掲書 52頁

63 阿部宗光「北京大学」(『アジア歴史事典』8 228頁 平凡社 1961年所収)

第二章 第三節

① 梁啓超「变法通議」(『飲冰室文集』第一冊台灣中華書局1960所収)

第一項

① 中国女学堂に触れた史料、著書、論文には以下のものがある。

汪康年、梁啓超等主編『時務報』

梁啓超『戊戌政變記』

梁啓超『飲冰室文集』

Archibald Little; *Intimate China*, London, 1899.

中国史学会主編『戊戌变法』(一)-(四)

舒新城編『近代中国教育史料』(上・中・下) 人民教育出版社 1961年

李又寧、張玉法主編『近代中国女權運動史料』(上・下) 伝記文学社 1975年

褚季能 前掲論文

湯志鈞『戊戌变法人物伝稿』増補(下) 中華書局 1982年

関斗基「19世紀末中国の改革運動と上海の商人子弟」東洋史研究11 1977年

小野和子『中国女性史』

夏東元「鄭觀應伝」華東師範大学出版社 1981年

深澤秀男『戊戌变法運動史研究』上(第4版) 四国学院大学東洋史研究室 1978年

本論文 第一章第四節

② 梁啓超「倡説女学堂啓」『時務報』第45冊。

……泰西女學駢闐都鄙。業醫課蒙。專於女師。雖在絕域之俗。邈若先王之遺。女學之功。盛於時矣。彼士來游。憫吾窘弱倡建義學。求我童蒙。教會所至女塾接軌。夫他人方拯我之窘弱。而吾人乃自加其桔桎。……抑亦中國之羞也。

③ 同前 () 内は筆者註

……甲午受創。漸知興學。學校之議。騰於朝廡。學堂之址。踵於都會。然中朝大議弗及庶媛。衿纓良規。靡逮巾幗。非曰力有不逮。未遑暇此瑣屑之事邪。無亦守扶陽抑陰之舊習。昧育才善種之遠圖也。同志之士。悼心斯弊。糾衆程課。共襄美舉。建堂海上。爲天下倡。

④ 同前

……振二千年之頽風。拯二兆人之顛命。力雖孤微。烏可以已。夫男女平權。美國斯盛。女學布濩日本以強。興國智民。靡不始此。三代女學之盛。甯必遜於美日哉。遺制綿綿。流風未沫。復前代之遺規。採泰西之美制。儀先聖之明訓。急保種之遠謀。海內魁桀。豈無憫游民士番之害者歟。愧愧窘弱。甯忍瞠目坐視。而不一援手歟。

⑤ 同前

……仁而種族。私而孫子。其亦仁人之所樂爲有事者也。天下興亡。匹夫有責。昌而明之。推而廣之。烏乎。是在吾黨也。矣。

⑥ 「上海新設中国女学堂章程」(以後「女学堂章程」と略称する。『時務報』四七冊 3186頁。

一學堂之設。悉遵吾儒 聖教。堂中亦供奉至聖先師神位。辦理宗旨。欲復三代婦學宏規。爲大開民智張本。必使婦人各得其自有之權。然後風氣可開。名實相副。故堂中一切捐助創始。及提調教習。皆用婦女爲之。

⑦ 「女学堂章程」附記『時務報』四七冊 3191頁

此學堂現爲經聘聯珊太守總其成已於十月二十六日在滬之高昌廟桂墅里鳩工訂期明年三月落成首夏開館

⑧ 「女学堂章程」 3186頁

二堂中暫設教習四人。中文西文各半。皆延請華婦主之。大率每學生二十人而設中西文教習各1人。

⑨ 同前

三堂中設提調二人。華婦西婦各一。皆常川駐學。照料學生出入。管束堂中女僕人等。酌奉薪水。

⑩ 同前 31頁

四堂中設內董事十二人。皆以曾經捐款之婦人爲之。主輪日到學。稽察功課。並助提調照料。管束一切。不領薪水。

⑪ 同前 3186頁

五堂中設外董事十二人。皆以曾經捐款之人之子若夫若兄弟爲之。主在外提倡集款。延聘教習提調。商定功課。稽察用度等事。不領薪水。

⑫ 同前 3186頁-3187頁

六堂中設司事二人。以男子爲之。主管銀錢出入。及堂內外瑣務。由外董事公擇老成謹愼。能會計者爲之。酌給薪水。

⑬ 同前 3187頁

七堂中暫招學生四十人。以後經費漸充。隨時增廣。

⑭ 同前

八學生年限。幼不過八歲。長不過十五歲。

九凡學生年在八歲至十一歲者。必畧識字。方許入學。十二歲至十五歲者。必畧識文法。能閱淺近之信札者。乃許入學。俟有定期。即刊日報中。以廣招徠。以示大信。

⑮ 同前

十纏足爲中國婦女陋習。……茲暫擬有志來學者。無論已纏足未纏足一律俱收。待數年以後。始畫定界限。凡纏足者。皆不收入學。

⑯ 同前

十一立學之意。義主平等。雖不必嚴分流品。然此堂之設。爲風氣之先。爲他日師範所自出。故必擇良家閨秀。始足儀型海內。凡奴婢娼妓。一切不收。

⑰ 褚季能 前揭論文 130頁

⑱ 「女學堂章程」 3187頁

十二堂中功課。中文西文各半。皆先識字。次文法。次讀各門學問啓蒙粗淺之書。次讀史志藝術治法性理之書。

⑲ 同前 3187頁—3188頁

十三堂中設齋門之學三科。一算學。二醫學。三法學。學生每人必自仍一門。惟習醫學法學者。於粗淺之算理。亦必須通曉。

⑳ 同前 3188頁

十四於三科之外。別設師範科專講求教育童蒙之法。凡自仍此科者。於各種學問。皆須畧知本末。則不必於三科之中。自占齋門。

㉑ 同前

十五紡織繪畫等事。婦學所必需。俟經費擴充。陸續延請教習。教以中外藝事。

㉒ 同前

十六堂中每月設課一次。由教習命題。評定甲乙。每季設大課一次。課卷送通人評定。列等第。設獎賞。

㉓ 同前

十七凡堂中執事。上自教習提調。下至服役人等。一切皆用婦人。嚴別內外。自堂門以內。永遠不准男子間入。

㉔ 同前

十八學堂初設租界地貴。圖成不易。擬設於滬南桂墅里。惟去城及租界過遠。必預備各人住宿之所。方爲妥便。

㉕ 同前 3188頁—3189頁

十九學生學費。仿照西國書院章程。畧爲減收。第一二三三年。每月每生收銀一元。若捐費既裕亦可依旧。或多數堂。以庥教育。

㉖ 同前 3189頁

二十堂中雇潔淨誠懇之僕婦等。學生來學者。一切侍奉。均須周到。

㉗ 同前

二十一凡學生習齋事。或師範科及藝事等。學成者由堂中給以文憑。他日即可以充當醫生律師教習等任。